



囚人たちと、 コカトゥー島

かつての流刑島へ行く小さな船旅

シドニーの海の玄関口サーキュラー・キーを出発したフェリーは、まるでバスのような気軽さで、入り江に面した小さな埠頭に立ち寄っていく。車だと大きく迂回しなければならない場所にも短時間でアクセスできるフェリーは、地元民の重要な足なのだ。世界三大美港のひとつと讃えられるシドニー湾を眺めつつ、フェリー通勤している人たちが少なからずいることが、ちょっぴりうらやましくなる。

さわやかな潮風を浴びながらミニクルーズ気分を楽しんでいると、独特のシルエットを持ったコカトゥー島が近づいてきた。工業地帯のような設備や昔風の建物が一際目立つ情景は、湾沿いに広がる風情ある景色とはあまりにも対照的で、異質な存在感を放っている。やがてフェリーは大きく弧を描き、島の北側にある埠頭に到着した。入口のインフォメーションセンターを抜けると、剥き出しの砂岩の断崖やトンネル、錆びた機械、大きなクレーン、芝生にずらりと並ぶテントなどが視界に入り、テーマパークかスタジオジブリ作品の舞台にでも迷い込んだような不思議な気分になる。

〔文〕 南田登喜子 〔写真〕 ミディ中嶋

知る人ぞ知る存在だったコカトゥー島。世界遺産に昨年登録され、訪れる人が増えている

Cockatoo Island



最初に造られた衛兵所。手強い囚人の反乱にも対処できるよう、細い銃眼が設けられている

囚人たちが造った流刑島

コカトウー島の歴史を紐解くと、「流刑囚」と「造船」という二つのキーワードが浮かび上がる。「ザ・プラトウ」と呼ばれる台地エリアには主に流刑植民地時代の史跡が、海拔の低い「ロウワー・アイランド」には船舶を中心とした重工業関係のさまざまな産業施設が残っている。

「流刑」というと、遙かなる土地へ凶悪犯を追放するようなイメージだが、罪を犯せば厳罰に処された当時のイギリスでは、強盗や殺人等の重犯罪者には死刑判決が下りるのが当たり前。オーストラリア東海岸のニュー・サウス・ウェールズ植民地へ輸送された囚人の大半は、貧困ゆえに罪を犯したスラム街や農村の若者だった。パンや砂糖などを盗んで、7年、14年といった刑期をくらった若い囚人は、植民地建設の労働力として、地球の反対側へ送り込まれた。

時は1839年。悪名高いノーフォーク島に収容されていた再犯者が、未開のコカトウー島へ移された。堅くて重いレッドガム（ユーカリの一種）の伐採や石切り作業などの労役に駆り出された囚人は、井戸や貯水槽をはじめ、生活に必要なあらゆるものを文字通りゼロから造り出し、役人や兵士の住居、自らを収容するバラック宿舎、哨舎などを建てていった。切り出された砂岩は、サーキュラー・キーを含め、当時シドニー全域で進められていた建築プロジェクトに用いられた。手斧で岩を削った地下型サイロは、直径7メートル、深さ6メートルほどの巨大な瓶形をしており、それぞれに約140トンの小麦を貯蔵することができた。オーストラリアに唯一現存する流刑囚によって造られた乾ドック（船の建造や修理を行う船渠）である「フィッツロイ・ドック」は、足に鎖を付けたまま作業を行って、深さ14メートルの人工断崖を造り出す必要があったため、1857年の完成までに約11年の歳月を費やした。

こういった「コンヴィクト・サイト」と呼ばれる流刑囚にまつわる場所は、オーストラリア各地に3000カ所以上残っており、昨年7月、そのうちの11カ所が「囚人遺跡群」として、ユネスコ世界遺産に登録された。コカトウー島もそのひとつで、流刑囚たち

の管理状況や労働・生活環境を伝える古い建物や史跡が無料で一般公開されている。

たった一人の脱獄伝説

とりわけ過酷な環境にあったコカトウー島は、流刑囚が罪を重ねた場合に送られる懲罰的な意味合いを持つ隔離地だった。ただし、絶海の孤島というわけではない。どの方向を見ても対岸の陸が目に入り、泳いでいけそうな気になる。「自由」への最短距離は、400メートル弱といったところだろうか。当然ながら、脱走を企てた囚人はたくさんいたのだが、鉄の鎖を付けたまま、今よりずっと多くのサメが生息していた海を渡るとは至難の業だったらしく、成功記録はたった1件しかない。

無事脱獄したのは、フレドリック・ワーズワース・ワードなる人物で、後に「キャプテン・サンダーボルト」と呼ばれた「ブッシュレンジャー（盗賊）」だ。妻が工具を持って島へ泳いで渡り、逃亡の手助けをしたという説があるが、真偽は定かではない。脱獄後は、州北東部を舞台に馬泥棒や強

盗を重ねた挙句、1870年に警官に撃たれて死亡した……と発表されたが、子孫たちは今も、「死んだのは、叔父のウィリアム・ワード」と主張している。何でも、1871年のアメリカの国勢調査の記録に、前年にアメリカへ着いた「フレドリック・ワード」とその母親「セラ・シェパード」の名が残っているのだという。どちらも珍しい名前ではないが、偶然同時期に同姓同名の母子がアメリカへ渡ったと考えるには出来すぎではないだろうか。

開拓時代、不公平な扱いを受けた貧しい人々は、権力者や富裕層への反感を抱き、支配階級に抗う勇敢な反逆者を英雄視した。オーストラリア人の特質である反権威主義・平等主義は、そのころの記憶なのかもしれないと思う。

キャプテン・サンダーボルトが出没した地域にも、「サンダーボルト・ウェイ」や「サンダーボルト・トレイル」と名付けられた道が残っている。最期の地とされるユララでは、馬車の待ち伏せポイントだった花崗岩が「サンダーボルト・ロック」として観光名所になっているだけでなく、逃走劇の果てに銃弾に倒れる模様を描写した9枚の絵画が町の博物館に保存されてお



(右上から時計回りに) ①ハーバー・ブリッジを臨む素晴らしいパノラマビューとクレーンの対比がユニーク ②現代美術の祭典「ビエンナーレ・オブ・シドニー」で発表された Serge Spitzer のインスタレーション作品「分子」 ©Sydney Harbour Federation Trust ③ウォーターフロントのキャンプ場。大晦日にはカウントダウン花火を見るため 2,000 人以上が島に泊まる ④先住民アボリジニが島の返還を訴え、4 カ月に渡って居すわった際に描かれた壁画

り、郊外へ続くハイウェイには銅像まで立っている。その人気ぶりからすると、彼が紳士的に振る舞い、銃で威嚇することはあっても、警官を含めて誰一人殺さなかったというのは、おそらく本当なのだろう。たくさん先の住民の命を奪った銃をアポリジニである妻は忌み嫌っていたという。

ニュー・サウス・ウェールズ植民地への囚人輸送は1840年に終わり、流刑制度そのものが廃れてゆくのに伴って、収容所も1869年に閉鎖された。1871年からは親のいない女子のための全寮制職業訓練校、及び女子少年院として利用され、1888年から1908年の間は再び刑務所に転用されている。同じころ、島の北東沖には、孤児や非行少年を収容した船がアンカーを下ろして船内で技術訓練を行っており、野菜を育てたり、レクリエーションのために、島に上陸することがあった。

フィッツロイ・ドックの労働者も、囚人ではなくなった。船舶の大型化が進んだ1880年代には、自由移民が2番目の乾ドック「サザランド・ドック」を建設した。完成当時の大きさは、長さ193メートル、幅26メートルと

世界一の規模を誇り、関連施設と共に植民地の近代工業化の一翼を担い、自立的発展を後押しした。

連合軍を支えた島のドック

20世紀に入ってオーストラリア連邦が誕生した後、コカトウー島がとりわけ活気づいたのは二つの世界大戦のころで、オーストラリア海軍が発足して間もない1913年から1921年までの間は海軍造船所となった。第一次世界大戦中の最盛期には4000人超が働き、大型船だけで22隻を建造したほか、250隻を改造し、保守・修繕のために500隻が入港した。第二次世界大戦中にサザランド・ドックに入港した船は750隻で、損傷を受けた船350隻が修理された記録がある。同盟国側にとって、コカトウー島は南西太平洋地域における貴重な船舶修繕の拠点となり、日本軍と交戦した多くの船がドック入りした。ガダルカナル島のロンガ沖夜戦で日本軍の放った魚雷が命中し、艦首に大きな損傷を受けたアメリカ海軍の重巡洋艦ニューオリンズもその中のひとつだ。

戦時中、徴用された商船・客船も

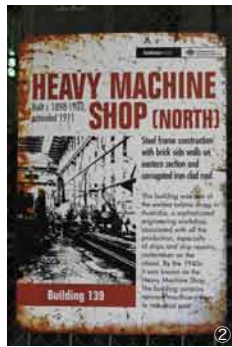
少なくない。兵員輸送船への転用が決まった豪華客船クイーン・メリー号も、この島で華やかな調度品が取り外され、代わりにバンクベッドやハンモックが備え付けられた。救命ボートは最大8000人分しかなかったというが、1万6、683人を乗せて航海した記録が残っている。輸送船としての総航海距離は91万6407キロメートルに達し、主にオーストラリアやニュージーランド、アメリカの兵士計76万5429人をヨーロッパへ送り込んだ。イギリス戦時内閣の首相だったウィンストン・チャーチルは、戦後、「2隻の女王（クイーン・メリーと姉妹船のクイーン・エリザベスのこと）が、戦争を2年早く終わらせた」と卓越した輸送能力に賛辞を送った。

2基の乾ドックは、造船関連施設が1992年に閉鎖されるまで稼働を続けた。戦後の発展にも重要な役割を果たした。島には、海運や船舶、重工業に関連する広範囲で多様な記録が残っており、近代産業化の過程を物語る貴重な遺産となっている。

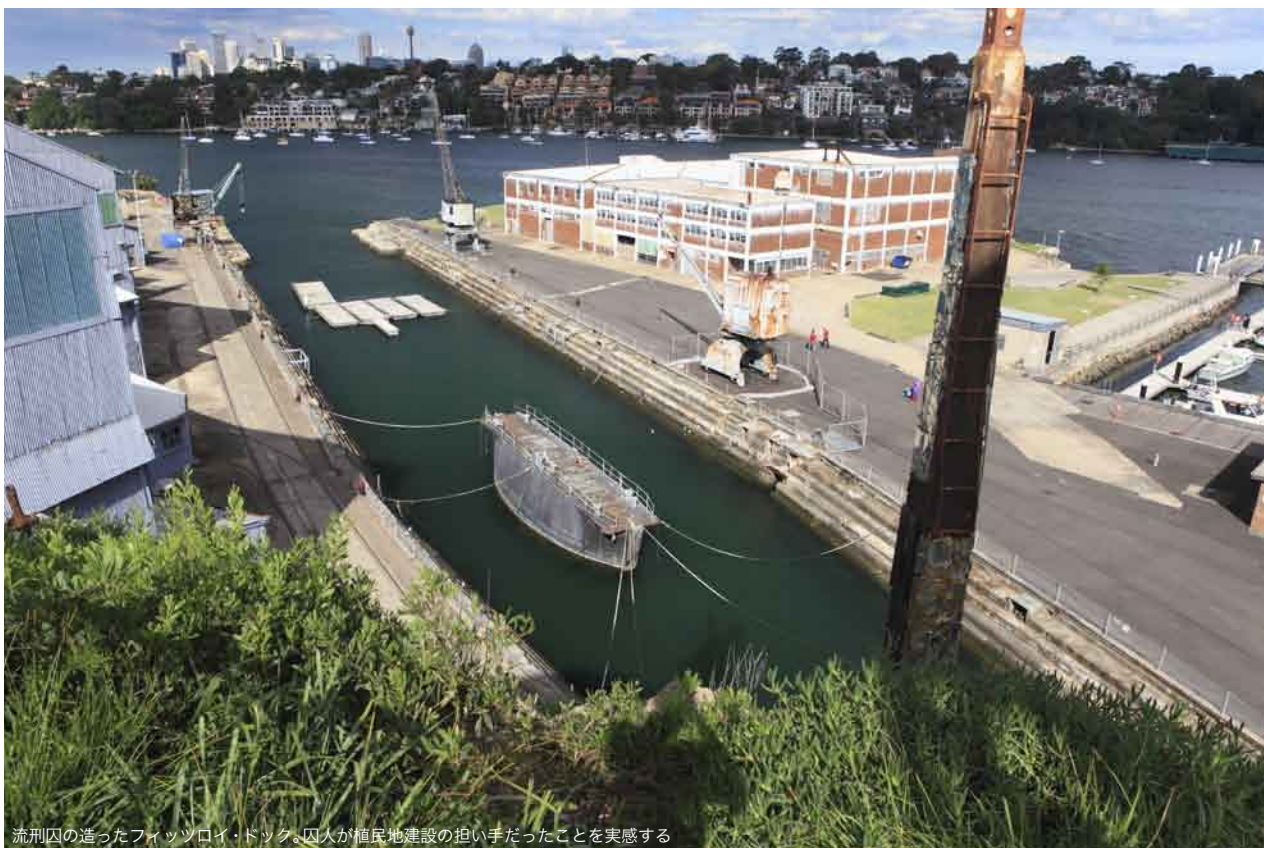
コカトウー島にカジノ建設計画が持ち上がった時、市民コミュニティグループの「フレンズ・オブ・コカ

トウー・アイランド」は、再開発と称して古いものを取り壊し、近代的できらびやかな空間を造り出すことに、「ノー」を突き付けた。シドニー・ハーバー・フェデレーション・トラストの管理下にある現在、歴史や遺産、文化、自然を保存しつつ、再生するために数々の試みがなされている。島にまつている物語を次世代へ受け渡そうという心意気がある限り、土地に根差した記憶が簡単に薄れてしまうことはないだろう。

流刑地史跡や近代産業遺産の島、という、陰鬱な印象を抱きがちだが、コカトウー島から眺めるシドニー湾の光景はそれは素晴らしく、解放感に満ちている。ウォーターフロントの一等地にあるキャンプ場は、週末や夏休みになると、家族連れで大にぎわいだ。帰りのフェリーを待ちながら、海に向こうにある高層ビルの街並みやハーバーブリッジを眺めていると、囚人の労働力がこの国の発展に大きく寄与したことを改めて実感する。遠足あるいは校外学習なのか、埠頭で無邪気に騒いでいる子供たちは、祖国から遙か遠い島へ移送された人々の悲哀をいったいどんな風に理解したのだろうか？ ■



(右上から) ①船体を灰色に塗りがえたクイーン・メリー号は、「グレイ・ゴースト（灰色の幽霊）」と呼ばれた (Australian National Maritime Museum 提供) ②歴史を解説する案内板 ③1841年に完成した流刑囚のバラック宿舎跡 ④この国の発展を支えた近代化遺産があちこちに残る ⑤古い建物はハリウッド映画の撮影に使われたことも



流刑囚の造ったフィッツロイ・ドック。囚人が植民地建設の担い手だったことを実感する